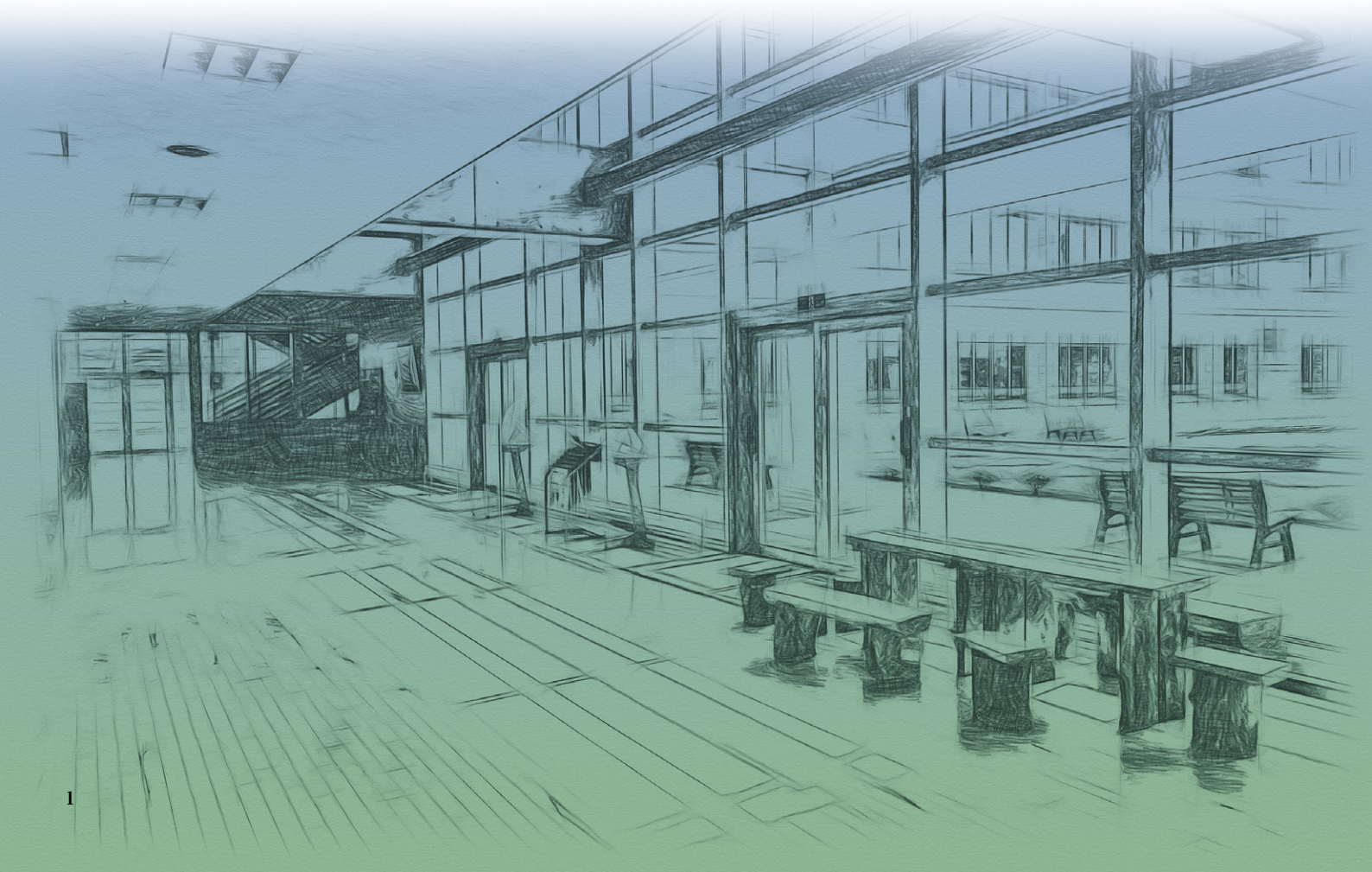
誇る歴史 かがげよ光

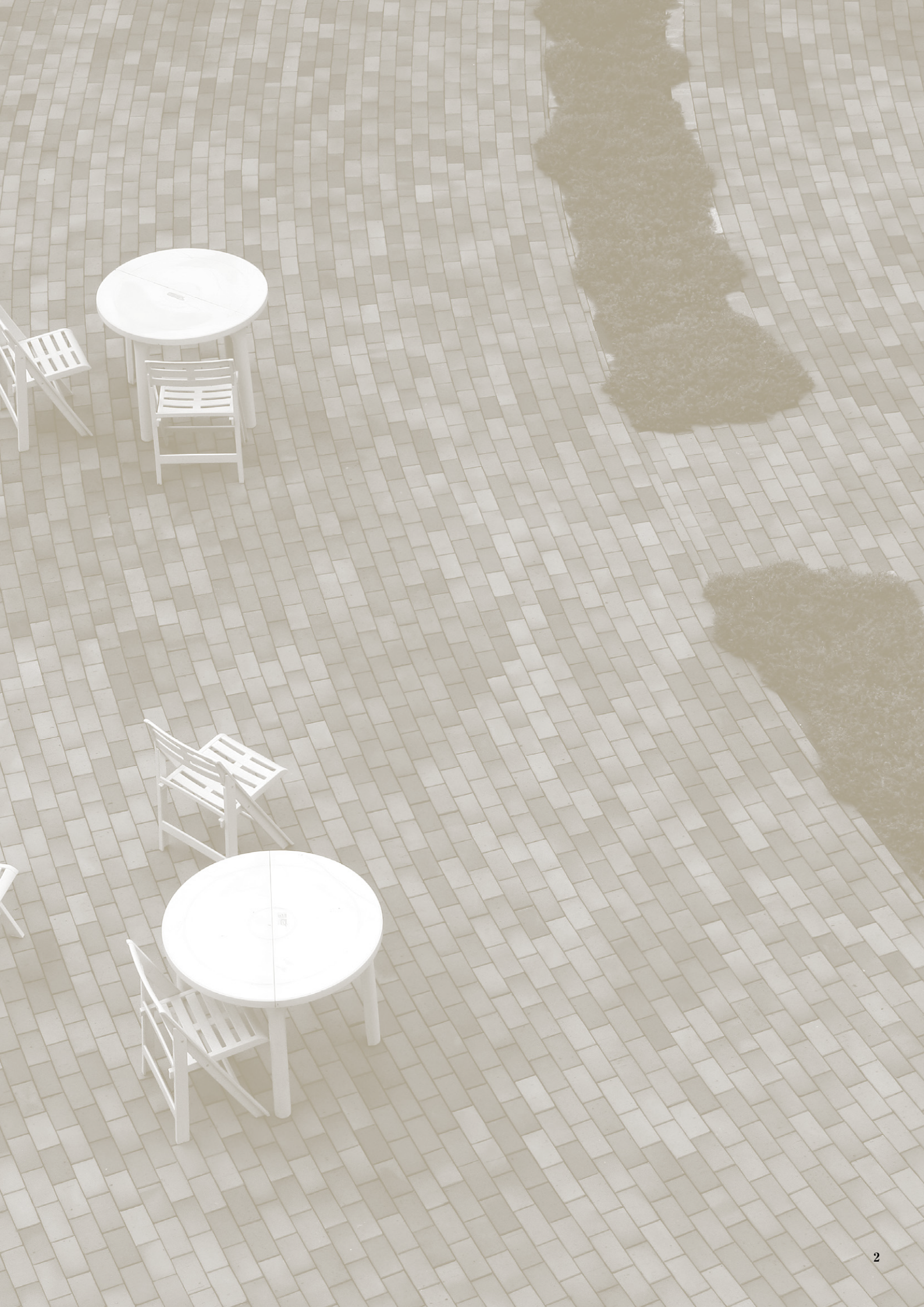
60年の歩み

青森県立八戸北高等学校
創 立 60 年 記 念 誌

誇る歴史　かかげよ光

青森県立八戸北高等学校は、皆様に支えられて今年で60年。
人生で云う還暦を迎えることができました。
還暦には新しく生まれ変わるという意味があります。
初代の校舎の周囲は一面の畑。土埃の嵐から守るため
職員・生徒が、何年もかけて植林とクローバーの植付けをしました。
そして、平成14年に建替えられ、現校舎に生まれ変わりました。
初代の横濱正大校長先生が第一回入学式で述べられた
「我々が道を創ってゆくのです。」の精神を受け継ぐ生徒も、
今年60回生を迎え入れました。
シンボルだった「きざはし」は、正面玄関前に移設され、
「青桐」は、中央廊下でベンチとテーブルに姿を変え、
今も生徒達に憩いを与え、見守り続けています。
八戸北高校は、先輩方が創りあげた「誇る歴史」を胸に秘め
未来に向かい「光をかかげて」力強く前に進み続けます。





Contents　目次

本　文 body of letter

04 校長挨拶
青森県立八戸北高等学校校長　種市　朋哉

05 後援会理事長挨拶
青森県立八戸北高等学校後援会理事長
創立60年記念事業実行委員会委員長　泉山　元

06 祝　辞
青森県立八戸北高等学校父母と教師の会会長　石丸　俊浩
青森県立八戸北高等学校同窓会会長　上見　昇

08 創立60年記念事業

10 草創期の記憶

12 沿　革

18 写真と記録で見る10年間
学校行事
部活動の記録

30 私と北高
― 寄稿文（元教員・卒業生）

38 北高の今
北高生の今
部活動の今
進路実績

50 未来の北高創造
― 寄稿文（教員・生徒会長）

資　料 document

56 歴代校長

58 歴代父母と教師の会会長
歴代後援会理事長
歴代同窓会会長

59 校旗・校歌・胸章 他

60 過去の記念事業

61 創立60年記念事業実行委員会・事務局

ご挨拶

本校の教育活動にご理解とご支援を賜っております後援会、父母と教師の会、同窓会をはじめ関係各位に心より感謝申し上げます。地域の期待を担い普通科高等学校として創立以来六十星霜、今ここに温故の足掛かりとして「誇る歴史 かかげよ光」と題する記念誌が上梓されましたことは誠に意義深く、玉稿をお寄せくださった皆様と編集にご尽力された僚友諸氏に敬意を表し、深謝申し上げます。

北高はこれまで、時代の流れに対応し、昭和四十四年度の理数科設置（平成十九年度末閉科）、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの二度の指定（平成十七年度からの第一期、平成二十二年度からの第二期）をはじめ、幾多の変遷を経て参りました。現在、進学重視型単位制高校（平成十八年度から）として、卒業者数は一万八千名を超えており、全国各地で多岐にわたる分野での多士済々の御活躍は、誇らしく輝かしい校風と伝統の証でありましょう。

我ら教職員の胸には常に「生徒を大事に」との思いがあり、その具現が旧校舎の生徒昇降口の「階（きざはし）」でした。生徒を中心に置く北高の校風は創立以来不易です。初代校長は草創期を振り返り、「『生徒を中心に』、『生徒のみを見つめよう』という先生方の集団的意志は、なんと高貴で純粋であったろう」と述べています。北高教育の真骨頂は、学ぶ者には自律を求め、挫けそうな者にはあたたかな手を差し伸べるところにあります。「秩序と責任の中での自由（秩序ある自由）」、「一人も捨てない教育」、連綿と受け継がれている全人的教育です。

この善き校風と伝統を深化展延させるべく、六十年の節目を機に学校経営方針に掲げた「めざす生徒像」は以下のとおりです。

- 好奇心を大切にし、個性を生かして、自ら考え探究する生徒
- しなやかな心で、自己の可能性を信じ、目標に向かって挑戦する生徒
- 思いやりを持ち、互いに支え合い学び合いながら、社会に貢献できる生徒

これを基とし一切揺らぐことなく、生徒を中心に据えた教育活動を今後も展開して参ります。

校門入口の創立六十年の横断幕。左右のシンボルマークは三年次生（58回生）のデザインです。左のマークの上段に、校章を挟んで左に空飛び巡る一羽のウミネコが、右に新校舎の「階」が、中及び下段には創立六十年を示す英字があしらわれています。その英字を下段から包み込むように昇り上がって咲き開くレンギョウの花群。レンギョウの花言葉は「希望」。連翹と書きます。

連翹の縄をほどけば八方に　　青邨

光をかかげ、歩み続けて高きに昇り上がる北高生の振り返るその道程に、新たな歴史が刻まれていくことを念じ、日々の教育活動の一つ一つを魂魄込めて推し進めていく決意を胸にし、身の引き締まる思いを禁じ得ません。八方に自由そのまま大きく広がり咲き誇るレンギョウの濃黄のごとく、未来への希望と光に満ちる我らが北高の更なる発展進化を一途に願いつつ。

青森県立八戸北高等学校校長
種市　朋哉

ご挨拶

青森県立八戸北高等学校が、創立六十年を迎えました。この間、歴代の校長先生、教職員そして地域の皆さま方を始め多くの方々からご理解とご協力を賜り、創立六十年記念式典を迎える運びとなりましたことを、お喜び申しあげますとともに記念事業実行委員長として衷心よりお礼申しあげます。

本校は、昭和三十八年、八戸市内三番目の普通高校として開校しましたが、なぜか校訓がございません。秩序と規律ある自由のもとで、生徒一人一人が自己の可能性を見出し、長所を伸ばし大きく成長して欲しいとの創立当時の先生方の深い愛情がそこにあったのではないかと思っております。

本校の特徴は、進学重視型にあって文武両道を標榜していることにあります。必修科目のほかに、生徒の進路・適性・関心により科目を選択できる進学重視型単位制を取り入れた特色ある教育活動が行われてきました。一方で、部活動においては、演劇・吹奏楽・弓道などは全国大会でも活躍しています。

私も三回生でありますが、開校当初の校舎の周りは畑で家一軒もなく、北高砂漠といわれた泥だらけの通学路からすれば、現在の環境はまさに隔世の感があります。六十年が経過しましたが、創立当時からの学校の理念が現在の生徒の皆さんに脈々と受け繋がれているのをみますと、誠に喜ばしく誇りに思います。校歌の「北はきびしく　きよきもの」は、北高生の精神的な柱で、その校風と伝統、それに裏付けられた誇りを受け継いだ卒業生は、今や一万八千人を超え全国各地、各界で活躍しております。

後援会では創立六十年記念事業として、生徒会館にＩＣＴ環境整備事業のプロジェクター一式を整備いたしました。更に、吹奏楽楽器三台も購入いたしましたが、今後とも母校のより良い学習環境の整備に、八戸北高に関わりのあるものが、更に努力を重ね、百年を目指し一歩一歩着実に歩みを進みながら新たな伝統を積み重ねてまいりたいと思います。

最後になりますが、関係各位のご指導とご協力をお願い申しあげますとともに、卒業生の更なる飛躍とご活躍を祈念しご挨拶といたします。

青森県立八戸北高等学校 後援会理事長
創立60年記念事業実行委員会委員長
泉山　元

「きざはし」引き継ぐ思い

青森県立八戸北高等学校が、創立60年という輝かしい歴史の節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。また、これまでの歩みを克明に綴る記念誌が発刊されますことは、実に意義深く、心からお喜び申し上げます。

開校当初、一回生の大先輩方は、まだ、校舎が完成しておらず、小学校の校舎を間借りでの授業を経て、完成後、現在の場所へ移動し高校生活を送ったと伺っております。その校舎も、途中、窓枠等の改修を行い、その後、取り壊しを経て、新築校舎へと生まれ変わり現在に至ります。そして、創立60年記念にて、ＩＣＴ環境の整備を始め、更に、充実した環境を整え、今後益々、高校教育の一翼を担う、青森県の教育を支える学校として、未来を拓き、担う人材を育成し、世に送る学び舎として、その存在意義を高めようと、皆さん、一丸となって取り組んでいます。その60年の結実として、政治・経済界を始め、多種多方面でご活躍されておりまし同窓生を輩出しています。後輩の良き鑑となり、牽引力となっていると思います。

さて、本校の今も昔も変わらず、引き継がれていることがあります。それは、生徒が主役であるということです。その象徴が、「きざはし」です。昔は、正門の正面に、十数段の階段「きざはし」があり、生徒用玄関がありました。現在は、数段の階段での生徒用玄関でありますが、正門から真直ぐに同じような趣旨での作りとして、当初からの理念と伝統を引き継ぐ形となっており、現在も、「生徒が主役である」とする校風を守っています。

時代の流れは、時に非情で、少子化の波にはかなわず、本校もまた、定員削減という現況になっております。しかしながら、そのような中でも、優秀な人材が、入学を希望しています。これからのより良い歴史を作っていって下さると切に願っています。

私自身、本校十七回生ですが、卒業後、まさか、ＰＴＡ会長として、創立60年記念行事に携わるなど夢にも思っていませんでした。たくさんの保護者の皆様のご協力を頂きながら、ＰＴＡ活動を行っております。人の和の力を、つくづく感じさせられています。一人一人が力を合わせ、一日一日を積み重ね、コロナ禍での制限下で、出来る範囲を考えながらの活動ですが、創立60年を節目とし、ＰＴＡ活動もまた、子供達が高校生活を有意義に過ごせるように、保護者の皆様、教職員の皆様、地域の皆様との連携を図りながら、これからも活動していきたいと思っております。

結びに、本校発展の為に、ご尽力されました方々へ深く感謝申し上げますとともに、益々の御発展を心から御祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

青森県立八戸北高等学校
父母と教師の会会長
石丸　俊浩

本当に大切なもの

八戸北高等学校創立六十年、誠におめでとうございます。同窓生一同、心よりお祝い申し上げます。

昭和三十八年、八戸市の新しい教育の拠点として、地域に望まれ開校した北高も六十年の月日が経ちました。第一回卒業生も令和四年には七十五歳を迎えます。新設校、パイオニアと言われた北高も、地域に貢献できる立派な伝統校に成長しました。

私は同窓会に出席する度に、先輩方、そして後輩もそうですが、本当に北高が好きなのだと感じます。同窓会の会報の名前でもある「きざはし」は、言わずと知れた北高のシンボルでした。「きざはし」とは旧校舎の二階渡り廊下にある生徒用の玄関に通じる階段のことです。そこには毎朝毎夕のドラマがあるのです。生徒指導の怖い先生が睨む中、遅刻寸前に滑り込む快感。私は白銀台から自転車通学をしていました。ある日寝坊をして、ほんの数分遅刻をしてしまいました。生徒指導の先生に「上見遅いぞ、どうして遅刻したんだ」と言われ、咄嗟に口から出た言い訳が「すみません向い風でした」なんとも幼稚な言い訳で、これは叱られると覚悟していると先生が、「じゃあ、仕方ないな」とユーモアを含んだ返事を返してくれました。それ以来、その先生が好きになり、もう遅刻はしないぞと心に誓ったものです。またある時は、北高祭にロックバンドでデビューを目指していた友人が、レッドツェッペリンのボーカルに憧れ、突然カーリーヘアーで登校してきました。その日は学年朝会のある日で、案の定友人は学年主任の先生から、「君はその髪型が似合っていると思うのか」と指摘されました。友人がキッパリと「はい思っています」と言うと、先生から「それならよろしい」と寛大なお裁きを下して頂き、朝会の場がとても和んだ空気に包まれました。皆さんも一人ひとり、出会った先生や友達との色々なドラマが思い出として残っていると思います。そしてそれは何年経っても、たとえ校舎が新しく変わったとしても、消えることのない大切なものです。

「自由、挑戦、絆」という校風は、六十年過ぎた今でも脈々と受け継がれていると、同窓会に出席する度に感じます。私が北高を好きな理由は、そこで出会った人間、そこに関わる人間が好きなのだと思います。近年のコロナウイルス発生という災害により色々なものが失われています。物やお金、仕事が失われ、今まであたりまえだと思っていた日常が実は有り難いことだったと知らされました。

しかし、青春時代の思い出、自分が高校時代頑張ったという誇り、先生から頂いた知識と愛情、同級生との友情、それこそが何年経っても決して失うことの無い、いつまでも心に残る、本当に大切なものだと思います。

青森県立八戸北高等学校 同窓会会長

上見　昇

創立六十年記念事業

●生徒会館ＩＣＴ環境整備

２０２２年８月27日設置
・大型プロジェクター一式
・インターネット回線及び無線ＬＡＮ設備

●創立60年記念シンボルマーク・ロゴマークの制定

生徒からの公募により、３年４組 関口実佳さんの案に決定

●創立60年記念 TVCMの放映・新聞広告掲載

・TVCM：青森朝日放送
・新聞広告：デーリー東北新聞社
　令和４年4月21日付朝刊1面にモノクロ３段
　令和４年10月1日付朝刊1面にカラー５段掲載

●創立60年記念誌発刊

「誇る歴史 かかげよ光　60年の歩み」

Ａ４判　62頁　1,200部

●創立60年記念横断幕の掲示

令和４年4月19日　校門前に設置

●吹奏楽部 楽器購入

・コントラバス
・オーボエ
・バリトンサックス　各一台

●創立60年記念式典の挙行

日時　令和４年10月1日㈯　午前10時
会場　本校第一体育館 他

※記念式典終了後、午後１時より八戸パークホテル ロイヤルホールにて開催予定であった創立60年記念祝賀会ですが、新型コロナウィルス第7波により中止となりました。

●創立60年記念品の制作

・タンブラー1,000個
　デザインは生徒より募集し、
　３年４組 松坂呼春さんの案に決定
・クリアファイル　３枚×1,300組

●創立60年記念　ドローンによる人文字(生徒)の空撮

企画　生徒会　撮影:令和4年9月2日

ここ白銀の台地に産声をあげて六十年
熱い想いで創られた当時の記憶

本校 初代校長　横濱正大先生（第一回入学式 式辞より）

さて只今入学を許可された三〇四名の生徒諸君。諸君は県下最多の入学志願者のなかから選抜され、本校第一回の入学生としての栄光を荷うことが出来ました。充分にその喜びを諸君の家族・友人と共にしたことでありましょう。しかし今日この日以後もはやいつまでも入学の喜びにひたっていることは許されません。いな入学の喜びをただちに明日からの勉学への意気込みに変えてゆかなければなりません。詩人高村光太郎は、その詩集道程のなかで「僕の前に道はない、僕のうしろに道は出来る」とうたっています。まことに八戸北高等学校の前には道はありません。我々が道を創ってゆくのです。私はこの詩をよんだとき、そして今まさに永遠の未来に向かって第一歩を踏み出そうとする本校を思ったとき、まことに恐ろしくしかしそれなるが故に身も心もふるい立つ思いがしたのであります。そうです。我々は充分な準備とたゆまぬ努力とを以って未来に向かって歩みだすべき運命を、栄光ある運命を荷っています。そして何年か後それが八戸北高の歴史と呼ばれ伝統と呼ばれるのでありましょう。それを創るのが我々なのです。

※創立十年記念誌「草創と定着」より抜粋

答辞

昭和41年３月８日　卒業証書授与式
第１回卒業生代表　小谷地昌子

※創立二十年記念誌「未来拓かん」より抜粋

初めて自ら試み、初めて許されてここに生活を営み始めた私たち、今、初めて卒業して初めてはばたきを待とうとしているのです。昭和三十八年四月、湊小学校の仮校舎の中で、新設八戸北高という産衣の中につつみこまれた私たち、第一回生という輝かしい名誉を得て、重すぎるほどの使命感を感じてきた私たち。その暖かいぶ厚い産衣を脱ぎ、新たなる栄誉と共に薄衣をまとって巣立ちゆこうとしているこの私たち。

開校式での校長先生のお言葉「僕の前に道はない、僕の後に道は出来る」私たちの後に道は出来たのでしょうか。

昭和三十九年四月、きっぱりと男性的にそびえる新校舎移転と共に、第二回生を迎えた私たち。踏みならした道を示し得たのだろうか。ごつごつした自然石の点々とする険しい道を――そう、険しいがゆえに君らもこの道を上れ――と願い続けた私たち。

ドリルの音が耳をおおう。それだけに建設の槌音も急テンポで、またたく間に私たちの目の前に全容を示した新校舎。立派なその設備。荒れた白銀平を近代の斧で耕そうとでもするかのようにそびえたった。うれしかった私たち。なでながら胸張っていたものでした。すばらしい校舎、私たちの学びの殿堂。

しかし、私たちの全てがあげた喜びの中に、向上への坂を上るように、高い願いを抱くように、険しい困難に挑むようにと期待して二階にかけてつくられた昇降口の意味を、学校の主客は生徒なのだ。その主客の玄関をと、正面に、しかも二階にかけた昇降口をおつくりになった先生方の尊いすみきった暖かさを感じていたのでしょうか。

厳しかった先生方、中学時代の甘やかな思いをすっぱりと断ち切れ、稚い気持ちを去れ、苦しい時は他の人も苦しいのだ。そして頂上がすぐそこにあるからだ。自らを激しく鍛えるのだ。厳しさと激しさへの祈りを教えてくれた先生方。受け取れずに悶えた私たち。

六十五分授業、一時間とて自習のないたゆまぬ緊張のあけくれ、遠足も全部徒歩で二十キロを歩み続けた私たち。そして汗して手を引き続けてくださった先生方。遅刻してその怠惰な心を鞭うたれ泣き出したあの人も、学習との鋭い対決で青ざめたこの人も、厳しいがゆえに激しいがゆえに誰一人として落伍する人もなく、合い言葉フロンティアの精神を支えとして日々を励み続けてきた私たちでした。しかし楽しかった学校生活。

白銀の丘に菜種が咲き乱れると教室の白い壁が黄に染まるのです。夕暮れ、昇降口の階段を降り立つと校庭の水銀灯がぼうっと光ってまるで舞台の一場面になるのでした。

全校生徒で出かけた修学旅行や学校挙げて催した体育文化祭。去年は法光寺合宿や八甲田登山、六ヶ所合宿もありました。

そして昭和四十年九月、校舎落成記念式典。厳粛な式の中で校旗の樹立、朗々と体育館を満たして行った讃歌、あの感激の一瞬を忘れることのできない私たちなのです。

願いをこめて植えた土手のクローバー、校舎のまわりを数千本でうずめた緑、春の日ざしを得てもうすぐ芽吹こうとしています。

初めて北高の厳しさを乗り越えることのできた私たちの前に芽吹きの季節が待っています。

しかし、確かその後ですぐあの猛烈な白銀の砂嵐が見舞うはずです。私たちの前途にも試練が待っているのです。その中を一人一人の力で歩みゆく私たちです。

でもご安心ください。

この北高校で、初めて自ら試み初めて許されてここに生活を営み始め、初めて卒えてゆこうとする栄誉と使命をもった第一回生の私たちです。北高校そのものともいえる私たちなのです。

誠実に、清々しく、みごとに努めて参ります。

しあわせです。

今、とてもしあわせな私たちです。第一回生としての使命感をともかくも果し得たよろこびです。

しかし、このよろこびとても、校長先生を始め諸先生方、三年間の苦労の連続だった私たちの父、母、兄……二回生、三回生のみなさんの協力、そして、そうあの校舎建設のコンクリートを流しこんでいた汗の人も含めて、全て北高校を育ててくれた方々の賜物なのです。

本当にありがとうございました。

校長先生、今階段を降りゆく私たちです。

諸先生、泥の道を踏みしめて歩き続けます。どうかこれからも見守って下さい。

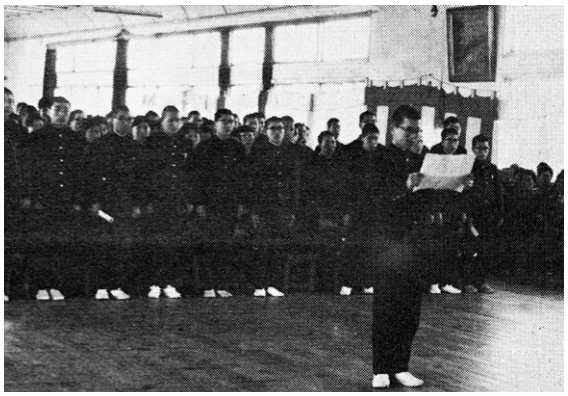
二回生、三回生のみなさん、みなさんにがっしりとバトンを渡します。どうか私たちの巣立ちの時に、新しい道程を踏みならしてきて下さい。私たちの果たし得なかった北高を育てあげて下さい。

さようなら、この短くて小さな言葉。その中に胸の全てをこめます。

さようなら、さようなら、みなさんさようなら

沿革

人から人へ
繋がる時代



昭和三十七年九月二十一日
青森県教育委員会第百六十四回定例会において、昭和三十八年四月一日をもって八戸市に青森県立八戸北高等学校（全日制の課程普通科）設置を議決。

昭和三十七年九月二十七日
青森県議会第七十一回定例会において、同議案を議決。

昭和三十七年十一月十九日
昭和三十八年度入学者募集定員を三百名と決定。
本校開設準備委員長に、県教育庁学務課長横浜正大を、同じく準備委員に青森県立八戸高等学校教諭楢山善四郎を任命。

昭和三十七年十二月一日
開設準備委員に、下北教育事務所主事林義雄を任命。

昭和三十八年一月十六日
開設準備委員に、相内弘之ほか五名を任命。

昭和三十八年四月一日
横浜正大ほか二十五名の教職員を任命。

昭和三十八年四月七日
八戸市立湊小学校の校舎の一部を仮校舎として、開校式、入学式を挙行。
入学許可男女あわせて三百四名（六クラス）。

昭和三十九年三月二十三日
新校舎へ移転。

昭和三十九年四月七日
昭和三十九年度入学式挙行。入学男女合わせて三百八十名（七クラス）。

昭和三十九年七月三十一日
新校舎完成。

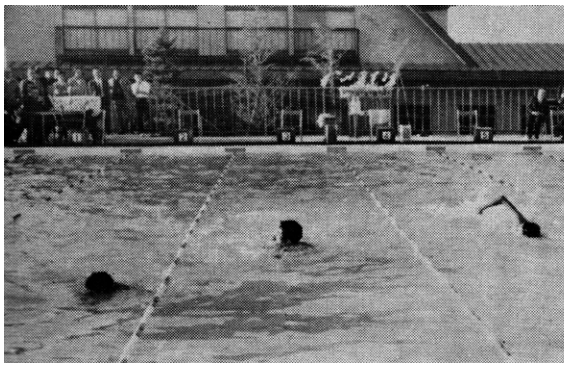
昭和四十年四月七日
昭和四十年度入学式挙行。入学男女合わせて四百四十五名（一学年八クラス体制開始）。

昭和四十年九月二十一日
校舎落成記念式典挙行。

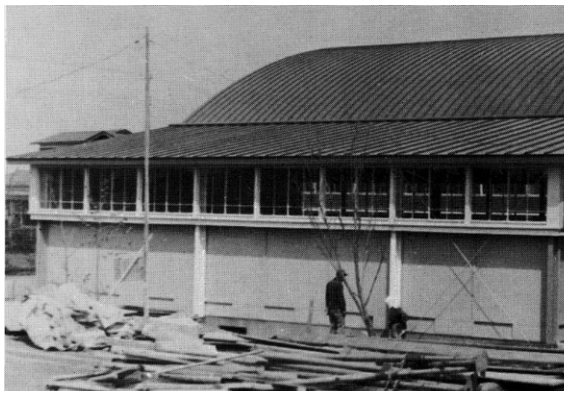
昭和四十一年三月八日
第一回卒業証書授与式挙行。卒業生三百六名。

昭和四十一年八月一日
生徒会館落成記念式典挙行。

昭和四十二年一月十一日
青森県教育委員会第二百十六回定例会において、昭和四十二年四月一日をもって南郷村に、青森県立八戸北高等学校南郷分校（全日制の課程普通科）設置を議決。



昭和四十二年四月一日
南郷村立学校設置条例の一部改正により、
青森県立名久井農業高等学校中沢分校を青森県立八戸北高等学校中沢分校
（昼間定時制の課程農業科）と改める。
昭和四十二年四月六日
青森県立八戸北高等学校南郷分校開校式及び入学式挙行。
昭和四十三年三月三十一日
青森県立八戸北高等学校中沢分校廃校。
昭和四十三年四月一日
南郷分校に昼間定時制の課程（農業科）併置される。
昭和四十四年四月一日
本校に理数科設置される（定員四十名）。
昭和四十四年九月二十二日
二十五メートル水泳プール（鉄鋼板構造）竣工落成式挙行。
昭和四十五年三月三十一日
南郷分校の昼間定時制の課程（農業科）廃止される。
昭和四十五年七月二十八日
柔道場完成。
昭和四十五年九月九日
弓道場（正道館）完成。
昭和四十六年十一月十五日
第二体育館竣工落成式挙行。
昭和四十七年六月六日
剣道場（斉心館）完成。
昭和四十七年八月
全国高等学校演劇コンクール「かげの砦」最優秀賞受賞。
昭和四十七年九月二十三日
創立十年記念式典挙行。
昭和四十八年四月一日
青森県教育委員会規則第十一号により青森県立八戸北高等学校南郷分校が
青森県立南郷高校に改められる。
昭和四十八年十月二十日
生徒会館増改築落成記念式典挙行。
昭和四十九年八月
全国高等学校演劇コンクール
「てのひらの雪ひとつぶの消えるまで」最優秀賞受賞。
昭和四十九年十二月
演劇部「東奥賞」受賞。



昭和五十四年七月十四日
第二運動場用地取得。

昭和五十六年六月十五日
第二運動場完成。

昭和五十七年七月二十八日
第一運動場改修工事完了。

昭和五十七年九月二十七日
創立二十年記念式典挙行。

昭和六十三年十二月十九日
北棟校舎外壁モルタル剥離改修工事完了。

平成二年八月
全国高等学校総合文化祭演劇大会
「演劇とは何か…」最優秀賞受賞。

平成二年八月
演劇部「文部大臣賞」受賞。

平成二年十二月
演劇部「青森県褒賞」受賞。

平成二年九月十二日
南棟校舎外壁モルタル剥離改修工事完了。

平成四年三月
吹奏楽部アンサンブルコンテスト
全国大会銀賞受賞。

平成四年三月三十一日
創立三十年記念事業「部室棟」竣工。

平成四年四月一日
平成四年度より普通科一クラス減、生徒定員千二十名（二十三クラス）。

平成四年九月二十六日
創立三十年記念式典挙行。

平成五年三月三十日
プール改築工事完成。

平成五年四月一日
一学年普通科一クラス定員四十四名となり、生徒定員九百六十九名（二十二クラス）。

平成五年十一月四日
第一体育館外壁その他改修工事完了。

平成六年四月一日
一学年普通科一クラス定員四十三名となり、生徒定員九百十二名（二十一クラス）。

平成六年十一月十四日
照明設備改修工事完了。

平成六年十二月十六日
排水施設整備工事完了。

平成七年四月一日
一学年普通科一クラス定員四十二名となり、生徒定員八百九十四名（二十一クラス）。

平成八年三月二十八日
第二体育館改修工事完了。

平成八年四月一日
一学年普通科一クラス定員四十名となり、生徒定員八百七十名（二十一クラス）。

平成八年十一月十五日
ボイラー改修工事、給水配管受水槽建屋改修工事完了。

平成九年四月一日
生徒定員八百五十二名（二十一クラス）。

平成九年七月
ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト
テレビ番組第Ⅱ部優良賞受賞。

平成十年四月一日
生徒定員八百四十名（二十一クラス）。

平成十一年三月一日
校旗を更新。

平成十三年八月
全国高等学校総合文化祭放送部門
ビデオメッセージ部門最優秀賞受賞。

平成十三年十月二十六日
弓道場（正道館）新築工事完了。

平成十四年二月六日
校舎改築工事完了。

平成十四年二月十五日
改築校舎へ移転。

平成十四年四月一日
平成十四年度より普通科一クラス減、生徒定員八百名（二十クラス）。

平成十四年十一月九日
創立四十年記念式典並びに校舎改築落成記念式典挙行。

平成十五年四月一日
生徒定員七百六十名（十九クラス）。

平成十六年四月一日
生徒定員七百二十名（十八クラス）。
平成十七年四月一日
二学期制を採用。
平成十七年四月一日
文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）に指定される。
平成十八年三月三十一日
理数科募集停止。
平成十八年四月一日
一学年単位制に移行、普通科六クラスとなる。
平成二十年三月三十一日
理数科廃止。
平成二十一年二月二日
第二体育館耐震補強工事完了。
平成二十一年三月二十五日
第二体育館床改修工事完了。
平成二十二年四月一日
引き続き五年間スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）に指定される。
平成二十二年四月一日
青森県立南郷高等学校が青森県立八戸北高等学校南郷校舎となる。
平成二十三年四月二十日
第一体育館・柔剣道場改築工事完了。
平成二十三年十二月二十八日
創立五十年記念事業「生徒会館」新築工事完了。
平成二十四年十一月十日
創立五十年記念式典挙行。
平成二十五年四月一日
青森県立八戸南高等学校と統合。
平成二十七年七月七日
第二体育館屋根改修工事（塗装）完了。
平成二十七年十一月十三日
屋上機械室改修（機械その他設備）工事完了。
平成二十八年十月一日
青森県立八戸北高等学校南郷校舎閉校記念式典挙行。
平成二十九年二月二十八日
柔剣道場天井改修工事完了。
平成二十九年三月三十一日
青森県立八戸北高等学校南郷校舎閉校。

生徒による創立60年記念の人文字　（撮影：三八五流通株式会社 2022.9.2）

平成二十九年十二月六日
消防設備等改修工事完了。
令和四年二月二十五日
冷房設備設置工事完了。
令和四年十月一日
創立六十年記念式典挙行。

寄稿文

私と北高

元教員や
卒業生達
北高で過ごした
方々が
当時の　そして今の
想いを
熱く語る

寄稿文 01

語れど尽きぬ

佐藤 昭雄（さとう あきお）
八戸工業大学教授
前八戸北高校校長

私が初めて八戸北高校の校門をくぐったのは、昭和58年春のことである。大学を卒業し、実家のある弘前市から電車を乗り継いで尻内駅に降り立ち、バスに乗って新任者打合せに向かった日のことである。

交通の便のあまり良くない時代でもあり、八戸北高校の場所もよくわからない私は、交通機関のトラブルもあって不覚にも遅刻をしてしまった。携帯電話も無い時代で連絡の取りようもなく、タクシーに乗り換え急ぎ学校を目指したものの30分程の遅刻となり、すでに打合せは始まっていた。

謝罪しつつ応接室に入っていくと、司会を担当していた佐鳥衛教頭から着席を促され、大粒の汗を拭きながら席に着くと、佐鳥教頭が「会議の途中ですが」と打合せを中断し、「教師たるもの遅刻をするとは何事か」と皆の前で一喝され、さらに冷や汗を流すことになった。

当時同期の赴任者は、秋山友則先生（元八西校長）、福井武久先生（元八東校長）、宍倉慎次先生（前青高校長）、木村智志先生（元三本木高校）等蒼々たるメンバーであった。

先輩教員も、小寺隆韶先生、森喜久夫先生、伊東美香先生、大滝清司先生、荒井弘武先生と名物教諭がそろっており、特に荒井先生は八戸北高校にラグビー部を創設する大きな原動力となった。

当時の八戸北高校は、新設校として進学実績向上が課題となっており、どの先生方も教科指導に熱心で課題や添削に追われていた。そんな中、どうしてもその雰囲気について行けず、打ち込めるものや居場所を見つけられない生徒たちがいた。そこで、荒井先生の声かけで生徒たちが集められ、ラグビー経験のある私に指導をして欲しいということになった。

最初はボール1個、メンバー2名の同好会から始まり、軟式野球部のフライが飛んでくる陸上競技場のフィールドが練習場所であった。翌年なんとか陸上部や柔道部からの助っ人を入れ15名の愛好会として試合に出場することになった。それまでは練習もサボりがちで半ば嫌々だった生徒たちも、初めて出場した春季大会Cブロック（県ベスト8がAブロック、ベスト16がBブロック、それ以下がCブロックである）1回戦で勝つことによってその意識も大きく変化していった。最終的にはBブロック2回戦、あと一つでAブロックというところまでチームは成長した。ちなみに、初めての公式試合は大鰐のあじゃら運動公園での試合であり、たかだかCブロック1回戦だったが、勝利した生徒たちは本当に嬉しそうで、試合後私は胴上げまでしてもらった。また、愛好会で遠征費が無かったので、試合に勝ったものの当日の宿泊費が無く、後払いで泊まって来たことも懐かしい思い出である。

そんな八戸北高校から始まった教員生活であったが、最後にまた校長として赴任できたことは望外の幸せであった。特に、当時の教え子やラグビー部の生徒たちが皆立派な社会人となり、親として子どもたちをまた八戸北高校に進学させてくれていることを本当に有り難いことだと思った。

在任中は、泉山後援会理事長や間東京同窓会会長を始め多くの方のご支援をいただき、退職の際には沢山の花や退職記念誌を作り贈ってくれた教え子たちもいて本当に感謝に堪えない気持ちでいっぱいであった。

現在、少子化による高等学校の統廃合が進められている中、八戸北高校も例外ではなく、将来の存続に向けその存在意義が問われている。多くの先輩教員や同窓生の長年にわたる尽力や努力の賜として今の八戸北高校があり、多くの生徒たちの飛躍の場として八戸北高校が永く存在し続けるためには、将来を見越して今何をすべきかを考え手を打つことが必要である。「語れど尽きぬ」八戸北高校ではあるが、「汲めども尽きぬ」そんな八戸北高校であることを願って止まない。

寄稿文 02

私の人生の選択にいつも「北高」が関わっていました

宮本 利行（みやもと としゆき）
昭和57年卒業（17回生）
前八戸北高校教頭

昭和63年4月、私は教員に採用されましたが、いつかは「北高」の教壇に立つことが望みでした。平成30年4月、教員人生30年たった50代半ば、八戸東高校に赴任したとき、ここが最後の勤務校になると思っていました。それが翌年3月、教育長から「北高」に教頭として赴任するよう申し渡されたときは、喜びとともに、人生にはこのようなことがあるのかと驚きました。

昭和54年4月、私は「北高」の17回生になりました。生徒玄関が「きざはし」を上って2階にあるのは生徒のことを最優先に考える学校だから、また、校訓がないのは生徒の自主性と自立心を育む学校だからと教わりました。自由な校風と校訓のない「北高」は、常識にとらわれず、自由な発想を持ちたいと考える私の価値観を育成してくれました。

大学では経済学を学びました。当時はバブル景気が始まった頃で、金融業界が人気だったこともあり、銀行に就職しようと考えていました。一方、教職に就くことも考えていたため、教職課程を取っていましたが、私が専攻する社会科の政治経済は、採用がない年が続いており、採用されることは難しいだろうと考えていました。それでも教員免許は取っておこうと「北高」で教育実習を行いました。実習が始まると、生徒らと過ごす毎日が楽しく、やりがいがあり、どうしても教職に就きたいと考えるようになりました。今から思えば、「北高」が人生の進路を決めてくれたといえるでしょう。

平成31年4月、「北高」に赴任しました。高校時代から残っている建物は第二体育館だけで、新校舎は明るく近代的になっていました。毎朝、職員玄関の上の美術室にあるミロのヴィーナスを見上げて出勤しました。「きざはし」は旧校舎と比べて段差が低く、横に広がり、多くの生徒が一度に上れるように作られていました。生徒玄関の上は音楽室です。この校舎は入口に芸術教室、中央に図書室を兼ねた学習センターがある設計です。「自由」はリベラル（Liberal）、「芸術」はアーツ（Arts）、リベラルアーツ（Liberal Arts）は「教養」。まさにこの校舎はここで学ぶ生徒に「教養」と「知性」を高めて欲しいとの思いで設計されたのではないかと思いました。

私は「北高」赴任が決まったとき、ある目標を持っていました。それは学校中に勉強できる場所をつくることです。勉強は教室でするものと考えられていますが、これまで勉強できる場所となっていた学習センターや3階のテラス以外に、広い中央廊下、2階のエレベータ近くの空きスペースに、テーブルとイスとホワイトボードをおいて、勉強できる場所にしました。勉強は学校で友人と一緒に、先生に教わりながらして欲しい。家では気持ちを切り替えて読書をしたり、好きなことをして欲しいと思ったからです。このことを得丸文野先生に話したら、「勉強は学校で終えて　おうちでは好きなことしよ♡」とフレーズを付けたイラストを作って学校中に貼ってくださいました。この目標を中途で転勤したことは心残りです。しかし、13回生の髙谷浩子先生や25回生の長谷川佳代子先生や28回生の大高亜希子先生など、熱い思いで後輩生徒の教育に取り組んでいる先生方が受け継いでくれるものと信じています。

念願の「北高」に勤務できましたが、まだ、「北高」の教壇に立つ望みはかなえていません。創立60年を迎える「北高」は昭和38年に誕生しました。この年は私が生まれた年でもあります。私の人生の選択にはいつも「北高」が関わっていました。そしてこれからも関わってくるような気がします。

寄稿文 03

青桐の椅子

能澤（のざわ） 大輔（だいすけ）
元美術教諭
（H14～16年度まで在籍）

後にも先にも、離任式で号泣した学校は大好きな八戸北高校だけでした。大学卒業後、ご縁があってか3月末に面接を受け、臨時講師として新校舎に引っ越したばかりの八北に赴任しました。

分掌は渉外部。

当時、主任の佐々木裕先生と創立40年記念式典の準備をしました。デーリー東北の新聞広告記事を作るため、新しくPCや編集アプリケーションを買った記憶があります。ちなみに、八北のホームページにある校舎の紹介記事は私が写真を撮影して制作したものです。

青桐の椅子ですが、当時、宇藤敬子教頭先生に声を掛けられ、何か思い出になるものを制作して欲しいと依頼を受けて、いくつかのアイディアから決めました。アイディアの中には、年輪が見えるように輪切りにした青桐のモニュメントもあったと思いますが、結果として制作したのは椅子でした。

技能技師さんにチェーンソーでの丸太のカットや、組み立てをお願いしましたが、木の皮を剥いだり、やすりがけを行ったりするのは、生徒と行いました。作業中、木の皮から虫が出てきて生徒が大騒ぎした記憶があります。

完成後は中央廊下に置かせてもらえましたが、木材の乾燥が進み、収縮からひび割れが発生したので補正をしました。

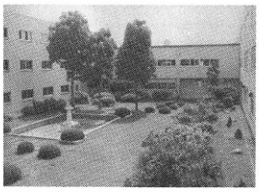
かくして、青桐の椅子は中央廊下で友達を待ったり、先生を捕まえて勉強を教えてもらったりするような、人と人を繋ぐ場所になりました。

当時から作品はコミュニケーションツールだと授業で伝えていたので、分かりやすく具現化出来たなと思っています。

解体される旧校舎を新校舎から見て思いましたが、形あるものはいつか無くなるし壊れますが、伝統は残ります。

「北は厳しく 清きもの」を芯とした、立派な人材を輩出する八戸北高校が変わらずあること、その歴史の一部に関われたことをとても誇りに思います。

※文中の記事は創立40年記念でデーリー東北に載せるために私が作った記事です。



旧校舎中庭(上)　制作風景(下)

青桐を残そう

旧校舎の中庭で北高生をずっと見守ってきた三本の青桐。北高の歴史とともにある青桐ですが、校舎改築にともない伐られてしまうことになりました。

シンボルでもあった青桐なので在校生の手でなんとか残し、新たな歴史を共に刻もうとプロジェクトがたちあげられました。生徒それぞれの想いが、長椅子やテーブルの形になり、青桐は再び北高生と共にあることでしょう。

寄稿文 04

後輩たちとともに

たかや　ひろこ
髙谷　浩子
昭和53年卒業（13回生）
現音楽教諭

憧れの八戸北高校へ入学でき、嬉しくて嬉しくて天にも昇る思いで校門をくぐったことを思い出します。入学してすぐ私の目に映ったのは、腰まで髪の長い三年生男子の先輩、バイクで通学してくる先輩、髭もじゃの先輩、ぺったんこの学生鞄、床につきそうなスカート等、田舎の中学校から進学した私には、びっくりする光景で溢れていました。親の仕事の都合で下宿生活となった私は、開放感と好奇心で、本当に楽しい高校生活のスタートを切ったのでした。

吹奏楽がやりたくて北高への進学を決めました。中学校と違って、生徒の自治力で成り立っている先輩たちの姿が、本当にかっこよく、私もあんな先輩になりたいと強く思いました。しかし、私はコンクールというものに出たこともなく、チューニングという言葉も知りませんでした。この年八戸市公会堂ができ、こけら落としにN響の演奏会があり、先輩たちがこぞって出かけていくのを見て、「ん？N響ってなに？」、私はそんな1年生でした。しかしこの部活動を通し、3年間で沢山のことを学びました。今の私があるのは、間違いなくこの部活動での経験や学びのおかげです。

そんな私が、今、顧問として後輩たちと音楽を奏でているのですから、本当に幸せです。生徒達を見ていると、当時の自分と重なることが多々あります。いつの時代でも、高校生は同じようなことで悩み、苦しみ、時には挫折を味わい、しかしまた立ち上がって、笑い、感動し、そしてたくさんの事を肌で感じていきます。歴史は繰り返されると言いますが、本当にそう思います。こうして今も後輩達は、青春という貴重な時間をこの場所で過ごし、たくさんの学びを得ています。もちろん、時間とともに変わっていくものもありますが、変わってはいけないもの、変わらなくてはならないものを間違わずに、後輩達と過ごしたいと思います。当時吹奏楽部の顧問だった小柴一弘先生が、私がこの職に就いたとき、「生徒は、大人扱いすると大人になる。子供扱いすると子供になる」、そうおっしゃって私を励ましてくださいました。自分が生徒と向き合いながら迷ったときは、今でもこの言葉に立ち返ります。

北高に赴任して8年目、当時とは違い生徒たちは随分お利口さんになっていました。1学年8組まであったクラスも今は6クラス、私の時には男子だけのクラス「男組」もありましたが、今は女子生徒が多く、クラス編成に少し苦労している面もあります。生徒はすこぶる素直で優しいと思います。欲を言えばもう少しガッツがあってもいいのかもしれません。失敗を恐れず、チャレンジする気持ちが、自分の背中を押してくれることもあるだろうと思います。失敗は次の成功に結びつけば、それはもはや失敗とは言わない。是非失敗を恐れずチャレンジしてほしいものです。頑張れ、後輩たち。

渉外部に配属になり、同級生とともに北高に係わっていけることも、とても嬉しく思っています。同窓会長上見君、同窓会東京支部長間君、後援会評議員柿崎君、バスケットボール部コーチ松浦君、いずれも13回生の同期です。お互い当時とはかなり風貌が変わっていますが、会って話すと高校時代に戻った感覚になるから不思議です。また、同窓会、後援会の方々とお会いする機会がありますが、北高愛にあふれている方々がたくさんいらして本当に嬉しく思います。そんな先輩たちの想いを現役生に伝えながら、彼らにも是非北高愛を持ってほしいと思っています。今、私は北高で音楽の授業を担当しています。生徒には「私たちの自慢の校歌だから、みんなも早く覚えて好きになるんだよ」と言いながら、毎年ピチピチの1年生を迎えます。

〝北はきびしく清きもの〟。4回生の先輩方が建ててくださった石碑に見守られながら、北高ライフを楽しみましょう。北高生万歳！

寄稿文 05

高校生活はゴーヤ味

馬場（ばば） 洋一（よういち）
昭和41年卒業（１回生）
司法書士

北高一期生は後期高齢者（七十五才）になりました。体力が衰え、気力が萎え、鏡を見ると泣きたい気分です。

多くの先生が亡くなり、同期生の訃報も続きます。俺の人生って何だったのかと自問することが多くなりました。私の三年間の高校生活は苦いゴーヤの味です。

入学して一年間は湊小学校の古い校舎に間借りでした。校舎はまだ有りません。顕微鏡等の教材も図書室も有りません。頼りになる先輩もいません。

何も無い新設校でした。二年目からは新校舎に移りました。労災病院から校舎までの道路は整備されておらず、農道を歩きました。雨の日はドロドロの道でした。周囲に家は無く畑だったので、春先など風の強い日は土ぼこりが舞い、校舎から労災病院が見えなくなりました。大変不便な思いをしましたが、先生方は良い学校にしたいと熱意に溢れていました。生徒も新設校ということで張り切っていました。先生方から強く言われたのは、決して後輩をいじめてはいけない、というものです。それが伝統となることを防ぎたいとのことでした。同期生は皆静かで穏やかだったと思います。校内で言い争いや喧嘩は一度も見ませんでした。とても良い校風でした。

恐縮ですが、ここからは私自身の事を書かせていただきます。

私の家は、とても高校へ行ける経済状態ではありませんでした。

父は栃木県に疎開していた日清サラダの工場の労働者でした。終戦となり横浜市に移動になる時に肺結核にかかり退職して八戸市に戻りました。私が六歳の時です。母はずっと働きづめで家計を支えてきました。しかし女の働きでは収入に限りがあります。高校に入ってからも教材の購入や授業料の支払いが困難でした。

二年の時、学校を辞めて働く決意をし、教科書を全部燃やしてしまいました。母が心配して学校へ行き相談したのでしょう、校長先生が学校へ来るようにとおっしゃっているからと、学校へ行くように促されました。翌日、校長室に入ると、横浜校長は「学校を辞めるそうだが、何の挨拶も無く辞めるのは失礼じゃないか」、穏やかな口調で話されました。学校を続けるよう説得され、続けることにしました。私としても本心は続けたかったのです。学校は育英資金の手続をしてくれました。横浜校長と母のお蔭で卒業することができました。

入学試験の時期となり、担任が二つの大学に願書を提出してくれました。

試験日の二日前に担任から電話があり、いつ出発するのか尋ねられました。

行きません、と答えると担任は怒りました。旅費や宿泊費のことを親に話せませんでした。担任には大変申し訳ないことをしました。

卒業が近づいたので就職することに決め、学校に募集がきている会社に応募しようと、職員室に行き担任に話しました。すると突然、隣の席に座っていた数学の先生が、「○○なんかに行ってどうするんだ」と言われました。私はビックリしました。その先生とは個人的に話をしたことが無かったからです。

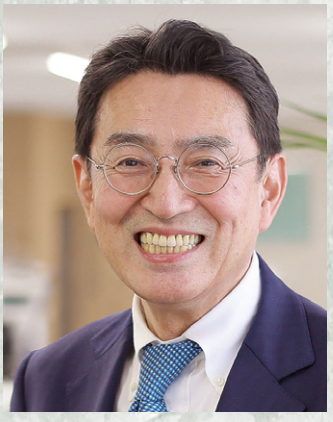
人生を変えてくれた先生に感謝しております。

振り返ってみますと、多くの方々のお蔭で人生を変えさせていただきました。

寄稿文 06

三千兆円の夢

横町（よこまち）　芳隆（よしたか）
昭和52年卒業（12回生）
八戸中央青果株式会社　代表取締役社長



北高開校60年おめでとうございます。私は12回生ですから、現在63歳の私も当時は15歳の若造ですが、北高もまだ12歳の若造だったのか思うと感慨深いものがあります。

63年の人生の内、わずか三年間を過ごした学び舎ですが、濃厚で充実した時間でした。もう一度人生をやり直すとしたら、間違いなく15歳と6ヶ月だったあの時に戻りたいと思います。やり直したいというよりは、味わい直したいという意味でのあの時にです。

北高では、それまで私が出会ったことのないタイプの連中ばかりで、高校生活は毎日が新鮮な驚きと出会いの連続から始まったように思い出します。どちらかというと私は、人見知りしない方でしたので、友達の友達は皆友達だというようなノリで、同期の連中を皆友達だと思い込んでいました。高校生活はとにかく楽しかった思い出ばかりです。おそらく当時は、楽しい事ばかりでは無く、躓いたり、失敗して落ち込んだり、辛いこともあったのでしょうが、今にして思えば全て楽しい思い出になっているということです。

当時の学園ドラマでは、青春をテーマに、勉強より友達が大事というメッセージを感じて、私自身も恋愛や友情こそが高校生活の重要なテーマだと信じていました。私は恋愛に縁がありませんでしたが、下校時にはカップルで手を繋いで帰る連中がたくさんいましたね。当時、北高は県南の学生に特に人気があって倍率もダントツ、他校に行った連中からは羨ましがられたものです。自由というのが北高の校風だったように思います。私は、恋愛よりも恋愛を語るのが好きな方の人間で、女性よりは男性に人気があったのかも。

友達といえば、人生を語る仲間が多かったし、そのような友を求めたとも言えます。どちらかというと蛮カラな人間で、人生とは何かと、哲学的に詩人的に人生を語るのが好きでした。2年の時に親しくなった友人に、横山正昭君と林一彦君がいます。両君とも北高で生徒会長をした人物ですが、良く横山君の家に泊まっては、少しのアルコールにも手伝ってもらいながら三人で夜更けまで話し込んだものです。布団に入るころになると、決まって最後は同じ話題になりました。三千兆円の使い道について、あれこれ議論を戦わせるのが常でした。答えはないのですが（笑）。今百万円があったら、という小さい話から発展したのだろうと思うのですが、1億円を持ったら、ここに百億円があったらという感じです。そうしているうちに、自分のために使うには大きすぎる金額に膨らんでくると、終いには世の為、人の為、世界の為にどう使うかという話になってくるのです。三千兆円の使い方という大きな夢を延々と語り続けては、眠りについているのです。そして毎月のように横山家に泊まり込んでは三千兆円の話を繰り広げていたことを思い出します。

この寄稿を依頼されたご縁で、久しぶりに三千兆円の夢を思い出しましたが、思えば私の人格形成と事業の方向性に大きく影響していることを感じて大変嬉しく思い出しました。友を持ち、夢を持ち、夢を語る時を持つこと。それが青春時代の特権であって、青春を与えてくれた北高に心から感謝しています。北高還暦おめでとう！北高万歳！

寄稿文 07

北高との縁に感謝

晴山（はれやま）　努（つとむ）
平成８年卒業（31回生）
フォーラム八戸（映画館）
劇場支配人

東日本大震災から11年が経った今年の３月11日のことだった。私は八戸の中心街にある映画館フォーラム八戸に勤めている。その日は遅番で午後からの出社だ。いつものように出勤時間ギリギリに、息を整えながらパソコンを起動した。ふと気が付くと、脇に何やらメモがある。

〝北高の記念誌の件で11回生のM様からお電話頂きました。K先生からのご紹介とのことです〟と。

M氏のお話によると、北高は今年創立60年を迎えるためその記念誌を作っている。それに寄稿してほしいとのことだ。なぜこの私に？

何はともあれタイミングが悪過ぎる。春休みを控えて超多忙なのだ。大変申し訳ないがお断りを…と思っていたが、断り切れずにお受けしてしまっていた。

自分は頼まれたら断れない性分であることを、M氏に私を紹介したK先生は十分ご存知なのだ。

K先生には３年間国語を教えて頂いた。嬉しいことに今は映画を沢山見に来て下さる常連様でもある。

３年ほど前には、私の１年生の時の担任で、３年間英語を教えていただいたY先生から「生徒に自身の体験などを話してほしい」との講演依頼をいただいた。私ごときがそんな大それたことを、と断る気満々だったが断れなかったのである。この時もK先生が黒幕だったことは想像に難くない。引き受けてしまった以上は在校生の皆さんに少しでも役に立つお話をしたいと、自分なりに試行錯誤した。

30年近く前にお世話になった先生がお２人も、巡り巡って北高で再び教鞭をとられている（令和３年度時点）という事実に驚き、そして嬉しかった。

講演自体、私としては65点くらいだったと自己採点している。余計な話を沢山してしまったのだと後から気付いた。だが、こんな経験はしたくてもできるものではない。全校生徒、教職員の方々９００名以上を前にしての１時間の講演であった。準備、反省を含め、最も勉強させて頂いたのは、他でもないこの自分自身だった。

北高の縁と言えば、仕事の取引先や商店街の組合でも北高卒業生が多くいる。同じ北高出身ということで仲間意識が強まり、その後の関係もうまくいっている。

ふと思い返してみると、我々31回生の卒業式はなんともあっさりしたものに感じた。だが今思うと、30年経っても60年経過しても、まだまだ北高との縁は切れることなく繋がっているのだ。気が付くとしっかりと目に見えない糸が張り巡らせされている。嬉しいことだ。コロナ前には同級生らと集まったりしていたのがこの上ない楽しみだった。早くコロナが収まって、また皆で昔話に花を咲かせられたらと切に願う。北高の60年を心から祝い、乾杯しよう。

北高生の今

2020年の新任・入学式。
互いの顔が見えない式でした。

ヒロキの
受付
青春元っ気す。
ワダの一品天下無
60祭
Saito
Student
BUSY NAMA

生徒です。
34
BUSY MAMA
Saitos
プリン山大作戦
Paragreen

部活動の今

KITA H.S. Club Activities

女子バレーボール部

自他共に認める個性豊かなメンバーぞろい。横断幕にある「楽しめ、全力バレー」を目標に、バレーボールを全力で楽しみながら、日々練習に励んでいる。

男子バレーボール部

「県ベスト８」を目標としている。持ち味は攻撃力。練習中の声出しを決して疎かにしない。第二体育館に入ると、元気でさわやかなあいさつで迎えてくれる。

水泳部

目標は「東北大会出場」。各自の個人練習が主だが、学校でも週１回の陸上トレーニングを行っているので部員内のコミュニケーションも取れている。東北大会に進む部員も多い。

軟式野球部

文武両道、「楽しむ野球」をモットーに活動している。練習試合や試合の数が少ないからこそ、第一グラウンドでの日々の練習を大事にしている。

卓　球　部

日々技術の向上に取り組むとともに、人としての成長も目指して切磋琢磨している。令和３年度、北奥羽大会では団体、個人で入賞している。

女子バスケットボール部

地域に応援されるチームになることを目指している。限られた練習時間を最大限に活かす練習を積み、R３年度県高総体ではシード校を破り県ベスト４を勝ち取った。

男子バスケットボール部

目標は「県ベスト８」。部員の仲の良さはどの部にも負けないと自負する。蕪島のゴミ拾いなど地域貢献活動にも積極的である。R３年度県高総体ではベスト16であった。

陸上競技部

男女隔てなく切磋琢磨し合っている。部としての団結力を高めながらも常に自分への挑戦も忘れない。「全国大会出場」を目標に掲げ、東北大会出場者も多い。

剣　道　部

目標は剣道を通じた人間形成。何でも言い合える仲間とともに、お互いにアドバイスし合いながら技の精度を上げ、上位大会を目指し鍛錬している。

弓　道　部

弓道場には「感謝」の文字が掲げられている。「感謝」と「弓道即求道」の精神で高みを目指している。R２年度には生徒主体の部活動が評価され部活動奨励賞に輝いた。

女子バドミントン部

男子同様、目標は「市内１位、県ベスト８」。お互いにアドバイスし合いながら、いかに強くなるかを考え、他地区の経験者と戦う日に備え、練習に励んでいる。

男子バドミントン部

目標は「市内１位、県ベスト８」。ほとんどが初心者からのスタートである。しかしながら、バドミントンの楽しさを知ることにより、日々上達を遂げていく。

硬式野球部

目標は「甲子園出場」。自ら考え自ら行動する集団として日々練習に打ち込んでいる。令和４年度は、県春季大会に地区代表として出場し、甲子園予選は２回戦に進んだ。

サッカー部

目標は、高校サッカーを通じて「人として成長」すること。成長なくして成功なし。自身の長所・短所と向き合い、チームに貢献できる強い人間を目指す。

ソフトボール部

目標は「県ベスト８」。団結力の向上と、基礎を重視している。基礎を固めることでより素晴らしいパフォーマンスができるようになるという考えの下に練習に励んでいる。

テニス部

目標は全国大会出場。主な練習コートは東運動公園のテニスコート。練習時間の確保に工夫を凝らしながら、感謝の心を忘れず練習に励んでいる。

ソフトテニス部

全員がしっかりコミュニケーションを取り合いながら、和気藹々とした雰囲気で練習に励んでいる。R３年度の県新人戦では女子団体はベス８であった。

吹奏楽部

音楽活動を通して人として成長することを目標の一つとしている。今年度は記念すべき第 50 回定期演奏会が行われた。最近は、県大会を勝ち抜き東北大会に進むことも多い。

囲碁・将棋部

実戦を中心に練習を行い、部員みんなで検討に加わり、学びを深めている。令和３年度は全校大会にも出場し、県高総文では、将棋部門Ｂクラスで優勝した。

演　劇　部

目標は東北大会出場。個性的な部員による個性的な部。ここ３年では二度県大会に出場している。今年度は記念すべき第 50 回自主公演が無事行われた。

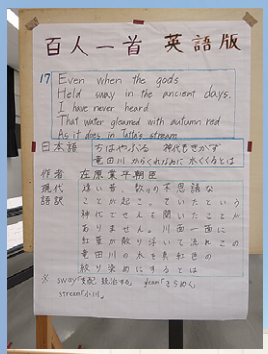
地　学　部

地学を軸に、物理学や生物学などの分野において、自分の興味あることについて研究をしている。今年の北高祭では放射線の可視化実験などを行った。

科　学　部

県高総文祭入賞や全国高総文祭出場を目標にしている。研究発表や、文化祭での科学部展の企画運営などを行っている。北高祭での実験ショーは興味深い。

美　術　部



自分の ART を発見・表現できるようになるのが目標。高総文・県南展の作品制作、北高祭のポスターや看板作り、北高祭の企画など活動は多彩。卒業式、入学式の黒板アートも注目されている。

英語愛好会

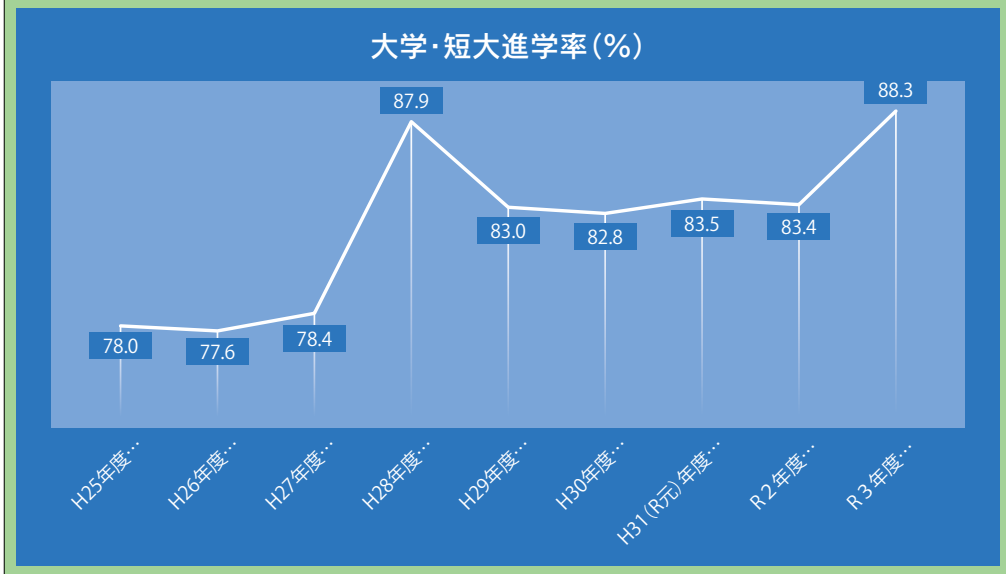
ALTの先生にも参加していただいて英語や英語圏の文化を学んでいる。今年の北高祭では英語のスタンプラリーや、百人一首英語版のポスター展示をするなどした。

家庭科部

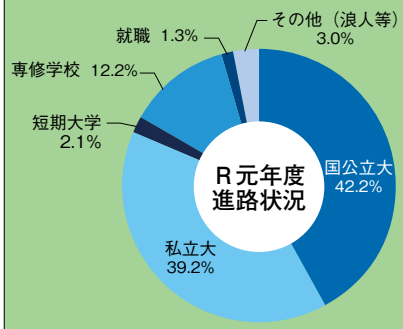
兼部の生徒も多いため月２回程度の活動だが、菓子づくりなどを行っている。今年の北高祭では、実験的に調理した内容をポスターにまとめて展示した。

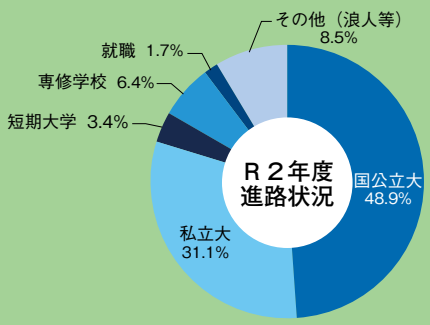
青桐の精神

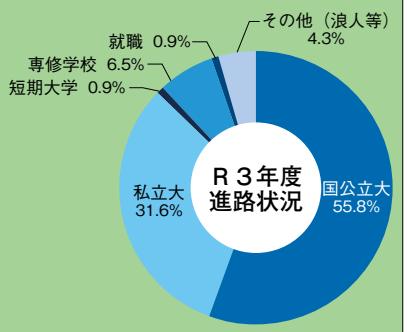
進路状況



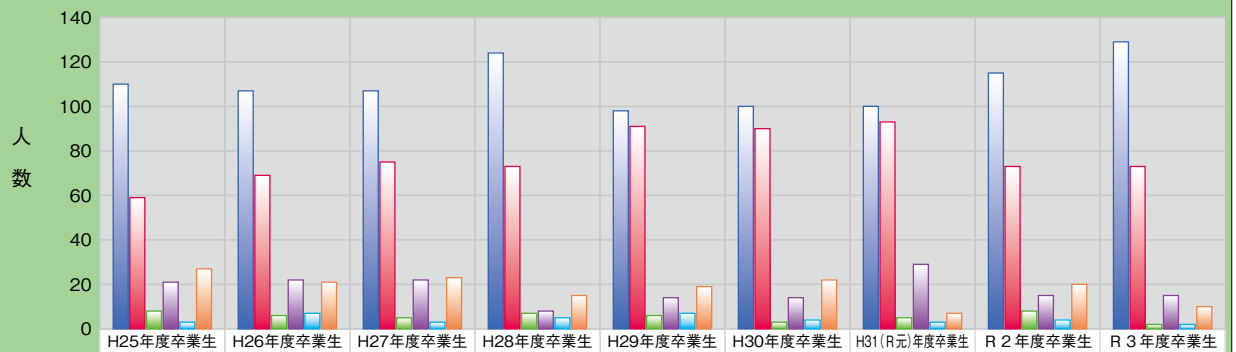
卒業生進路状況（R元年度～R3年度）







卒業生進路状況（H25年度～R3年度）



	H25年度卒業生	H26年度卒業生	H27年度卒業生	H28年度卒業生	H29年度卒業生	H30年度卒業生	H31（R元）年度卒業生	R２年度卒業生	R３年度卒業生
国公立・準大学	110	107	107	124	98	100	100	115	129
私立大学	59	69	75	73	91	90	93	73	73
短期大学	8	6	5	7	6	3	5	8	2
専修各種学校	21	22	22	8	14	14	29	15	15
就職	3	7	3	5	7	4	3	4	2
その他（浪人等）	27	21	23	15	19	22	7	20	10

直近３年間の進学先

国立大学

大学名	H31（R元）年度卒業生	R２年度卒業生	R３年度卒業生
小樽商大	2		1
北見工大	2	1	4
北海道大	1		
北海道教育大	4	4	9
室蘭工大	3	2	3
弘前大	11	14	23
岩手大	14	14	21
東北大		3	3
宮城教育大	4	3	2
秋田大	7	7	9
山形大	5	11	6
福島大	2	4	
茨城大	2	5	4
宇都宮大	2	1	
群馬大	1		1
埼玉大	4	5	4
千葉大		1	2
東京海洋大	1		
東京学芸大	1		
横浜国立大	2		
新潟大	1	2	4
富山大		1	
上越教育大			1
静岡大		1	
大阪大	1		
島根大	1		
長崎大		1	
琉球大		2	

公立大学

大学名	H31（R元）年度卒業生	R２年度卒業生	R３年度卒業生
はこだて未来大	1	2	
釧路公立大	1		1
名寄市立大		1	
青森県立保健大	4	11	4
青森公立大	3	2	1
岩手県立大		1	6
宮城大	3	3	5
秋田県立大	3	1	1
秋田公立美術大	2	3	4
山形保健医療大		1	
会津大			1
群馬女子大	1		
高崎経大	1	1	1
埼玉県立大		2	1
東京都立大	1		1
横浜市立大		1	2
山梨県立大		1	
新潟県立大	2		
福井県立大			1
長岡造形大	1		
静岡県立大			1
都留文科大	3	1	
長野県立大	1		
長野大	1		
福知山公立大			1
名桜大		1	

私立大学

大学名	R３年度卒業生	大学名	R３年度卒業生
札幌国際大	2	神田外語大	1
北海道医療大	2	東京情報大	1
北海道科学大	1	秀明大	1
酪農学園大	2	亜細亜大	1
青森大	1	北里大	1
八戸学院大	4	國學院大	1
八戸工業大	5	芝浦工大	1
弘前学院大	1	順天堂大	2
弘前医療福祉大	1	昭和女子大	1
盛岡大	2	中央大	2
岩手保健医療大	1	津田塾大	1
東北学院大	3	東海大	1
東北工大	3	東京経大	1
東北福祉大	6	東洋大	1
東北医薬大	5	日本大	1
宮城学院女子大	2	法政大	1
東北文化学園大	1	武蔵野音大	1
国際医療福祉大	1	明治大	1
高崎健康福祉大	1	明治学院大	1
群馬医療福祉大	1	神奈川大	3
目白大	1	東京工芸大	1
川村学園女子大	1	横浜薬大	1

準大学

大学名	H31（R元）年度卒業生	R２年度卒業生	R３年度卒業生
海上保安大学校	1	1	
防衛大学校			1

短期大学

大学名	R３年度卒業生
札幌国際大	2
北海道医療大	2

職業人と語る会

出張講義

卒業生からのメッセージ

きざはしと青桐

校長　上崎　厳

きざはしとは階段のことである。きざはしを上ったところに生徒の昇降口がある。昇降口の廊下から目を中庭に転ずれば、背の高い三本の木が並んでいるのが見える。青桐である。きざはしと青桐の取り合わせ、これは偶然ではないと思っている。

中国の儒学者であった朱熹シュキ、（1130 ～ 1200）に、「偶成」という七言絶句がある。

偶　成

少年老い易く　学成り難し
一寸の光陰　軽んず可からず
未だ覚めず　池塘春草の夢
階前の梧葉　已に秋声

老いるのは速いもので、それに比べて学問はなかなか進まないものである。
であるから、少しの時間でも軽々しく考えて粗末にしてはいけない。
池の土手に生えている草が、いつまでも春見た甘い夢を見続けているが、時はとうに過ぎ去り、階段の前の青桐の葉には、もう秋の気配が感ぜられる。

最後の句に、階前（階段の前）の梧葉（青桐の葉）とある。おそらく、本校草創の頃の先生方が、この句を念頭に置いて青桐を植えたのであろう。

中国では、子供が産まれると、学問ができるようにと、家の入り口の階段のそばに青桐を植える習わしがあった。（我が国でも、女の子が産まれると桐を植える習慣があったが、それは、将来お嫁に行くときのタンスの材料として植えたものである。）

春の若草が見るような夢を見続けて人生を終わるもよし、寸暇を惜しんで勉学に努めるもよし。ただ、今を盛りと青々と繁っている青桐にも、必ずや葉の落ちる秋（とき）がやって来ることだけは避けられない。なぜなら、それは、命あるものの摂理であるから。

私は、諸君が、これから始まる北高での三回の春秋を、夢を育てながら学び、人間として大きく成長してゆくようにと、こころから希望している。

（『'97 八北プラン　きざはし』より）

―教師・生徒の思い―

かかげよ光

未来の北高創造

私の思い

これからの北高へ

教頭　柴崎剛吉

過去、私の教員生活の中で初めて学年主任を務めることになった際、当時の勤務校の校長先生に「勉強してきてください」と送り出された学校が八戸北高校でした。当時の北高の進路指導主任の先生と1年次主任の先生から、北高の進路指導の年間計画や、生徒が自ら勉強に向かうことを習慣化するための取り組みについてご教授いただき、帰路につきました。北高と当時の勤務校では学校規模も生徒の気質も異なり、生かせるものとそうでないものがもちろんありましたが、同僚らと知恵を絞りながら、その後の6年間、学年主任として学年経営や進路指導、生徒指導に勤しみました。

このわずか半日の「北高の学び」が、私の教員としての自覚や自信の端緒となり、その後の教員人生にプラスの作用をもたらしました。何事も目的を明確にすることや、学びの環境を整えることの大切さのほか、高等学校三年間をトータルで考えることや、時間がないと嘆くのではなく作り出すことなどを経験の中から学び、苦楽を共にしてきた同僚や生徒たちのおかげで、自分の成長につながったのではないかと感じています。

そして今、あの日から17年の月日が流れたこの春、創立60年を迎える北高に教頭として赴任することとなった私にとって、「北高の学び」は毎日が新鮮です。私は通常午前と午後の2度、始業前の定期巡回（朝7時）を含めると一日に3度校内を一巡します。授業中は当然ですが、始業前にも各教室や学習センターで勉強に励む生徒の姿を見ることができます。きりりと前を向き学習に向かう生徒の姿は、時に弱い自分の心を鼓舞してくれます。私も歳を重ね、若い世代が一生懸命に物事に取り組む姿が、美しく尊いものと目に映るようになりました。以前とは立場が変わり、視点も変わってきましたが、一日一日「北高の学び」を積み重ね、自らの成長につなげていきたいと思います。

この北高の教育理念の一つ「秩序ある自由は責任が伴う」に感銘を受けました。この言葉には校訓を掲げないとする北高のポリシーとしての、また、自らの責任で個性を伸長させる強い意志や精神力を身につけてほしいとの思いが込められています。60年に及ぶ時間の経過の中で、北高の生徒及び教職員は、目標に向かって挑戦し、互いを尊重し、共に高め合う力を養ってきました。生徒は北高の生徒であることに、教職員は北高の教職員であることに誇りを持ち、社会の発展に寄与し、地域のリーダーとなる、または育てることを追求し、毎日、昇降口の「きざはし」を踏みしめ、学校生活に真摯に向き合い続けています。突如発生した世界的な感染症の流行や、不穏な北国（ロシア、北朝鮮）の動向など、先を見通すことが困難な世の中だからこそ、北高で培われた意志と誇りは時代とともに昇華され、次の世代へ脈々と受け継がれていくものと信じています。

私の思い

これまでの、そして、これからの北高生

教務部主任　川越淳智

本校創立60年の記念すべき年を職員として迎えることができたことは、大きな喜びです。60年記念を迎えるにあたり、一言ごあいさつさせていただきます。

私は、旧校舎最後の1年間、本校で勤務していました。年度末、新校舎への引っ越し作業を手伝ったことを覚えています。転勤後しばらくして、本校は青森県内初の「スーパーサイエンススクール（SSH）」の指定を受け、先進的な科学技術、理科・数学教育による将来の科学技術人材の育成を通じて、県内の理数教育を牽引する役割を担ってきました。11年間のSSH事業は平成27年度に終了しましたが、その成果は「ESDプロジェクト」（持続可能な国際社会の成長・開発に関する学習プログラム）等へ継承され、「総合的な探究の時間」に活かされています。

私が再び北高に戻ってきた平成31年（令和元年）、新型コロナウイルスの世界的大流行により、臨時休校や長期間の自宅待機など、学校教育は大きな制約を受け、「未知の常態」というべき日常へと様変わりしました。現在もなお、以前の学校生活に戻ることはできず、この「新たな常態」を受け入れた学習活動が展開されています。新型コロナウイルスの流行は様々な制約を強いる一方で、教育のICT化推進の原動力となりました。各教室にプロジェクターやWi-Fi環境、生徒用タブレット1人1台が整備されました。また、新しい学習指導要領に基づく探究学習重視の教育課程や、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点による学習評価が始まっています。新しい教育課程・学習評価や教育のICT化の背景には、地球温暖化、エネルギー問題、人工知能の劇的進化など、これからの予測不能な未来社会があります。社会の情報化や解決困難な課題に主体的・協働的に対応できる人材の育成が、今求められています。

北高には他校にはない強みがあります。1つは単位制高校であることです。生徒一人一人の多様な進路希望に合わせて必要な科目を自分で選択することができ、教員の重点配置により習熟度別やチーム・ティーチングによる授業が可能で、各生徒に合わせたきめ細やかな指導が可能です。また、SSH経験校だからこそできることもあります。SSH関連の専門性の高い研修会・講演会・発表会への参加、課題研究指導で蓄積されたノウハウ、研究機関との連携実績は、あらゆる教科・科目の探究学習等に活かすことができます。そのほか、本校は昨年度「ユネスコスクール・キャンディデート」に認定されました。「ユネスコスクール」は世界180か国以上の国・地域で約一万校、国内には約千校（2019年11月現在）存在し、ESDの推進拠点となっています。「ユネスコスクール・キャンディデート」は「ユネスコスクール」の前段階で、本校の「ESDプロジェクト」等の探究学習の取り組みが評価された結果です。これにより、国内のユネスコスクールとの交流・連携が可能です。今後はグローバルな情報発信や交流・連携の実現のためにも、「ユネスコスクール」の早期実現を目指します。

本校の掲げるめざす生徒像は、①好奇心を大切にし、個性を生かして、自ら探究する生徒、②しなやかな心で、自己の可能性を信じ、目標に向かって挑戦する生徒、③思いやりを持ち、互いに支え合い学び合いながら、社会に貢献できる生徒、この3つです。日本は、人口減少社会、経済の長期低迷など、これまで経験したことのない多くの困難に直面しています。答えのない難題にどう対応し、解決していくのか。北高での学びを通じて、互いに切磋琢磨し、地域の将来を支えるリーダーに成長していくことを期待しています。

私の思い

人にやさしく

生徒指導主事　竹中秀明

この度は、青森県立八戸北高等学校創立60年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

さて、現在の教育の場を取り巻く環境は10年前には予想できなかったものになっています。新しい教育観や多様な価値観への理解や多面的な評価法、そしてＩＣＴ環境の急速な発達などです。生徒たちは小学生の頃からパソコンやスマートフォン、タブレット端末に慣れ親しみ私達大人にとって新しいツールを違和感なく受け入れています。私達教師たちはそのような生徒たちに追いつこうと勉強する日々です。

そんな日々変化する教育の場でも変わらないこともあります。相手が今何を考えているかを考えることです。多くの教師たちは生徒たちの言動や表情、仕草の変化を見取って、「良いことあったな。」とか「機嫌悪いのかな。」など何となく感じるようになってきます。これは教師が生徒に対して必要な能力だけではなく、２人以上の人間がいれば人の気持ちや感情を感じる能力、すなわち「察する」ということです。「察する」を広辞苑で調べると「おしはかって考える。思いやる。」と言う意味です。例えば、悲しんでいる相手の気持ちを察する、とは相手が何に悲しみを考え〈＝おしはかる〉、何をしてほしいのか想像〈＝思いやる〉することです。これはなかなか難しい行為です。特に初対面の人の気持ちは察することはできません。相手との関わりの積み重ねがあり、その人の生き方や環境を知っていないと察することができるわけが有りません。

「察する」ためには観察と経験が必要です。人は誰でも他人に対しての好悪がありますが、それだけでその人を決めつけないことです。好きな人にもアレ？というところもありますし、嫌いな人にでも素晴らしいところがあります。それを良く観察することによって、その人の心情を想像することができるようになり、次にその人に対してどんな言葉をかけ、何をしてあげれば良いかを考える。その時に最適な言動は一つとは限らないし、時には失敗して、相手を怒らすこともあります。これは経験しないとわかりません。試行錯誤を重ねていくうちに何もしない方が良いこともあることにも気づいたりもします。こんなことを繰り返すと人の好悪とは離れたところで人を見ること、多面的な物の見方ができます。

「察する」ことははっきりと物を言わない、あいまい、ノーと言えないなど悪い意味で捉える向きもあります。私は「察する」というのは、人と関わる上での心構えでないかと思います。その積み重ねが人としての信頼関係に結びつき、公の場における発言の信頼になり、最後は絆の深さに繋がっていくものです。最近は人とのコミュニケーションが苦手な人が多くなっています。それは、他人だけでなく親子、兄弟関係でもみられるようです。言葉は暴力と同等以上に人を傷つけます。「察する」ことは本当に難しいけれど、もし私達が人を良く観察し、経験を積み人の心情を「察する」ことができるようになれば、私達の生活がちょっと居心地の良い場所になるのかなと思います。

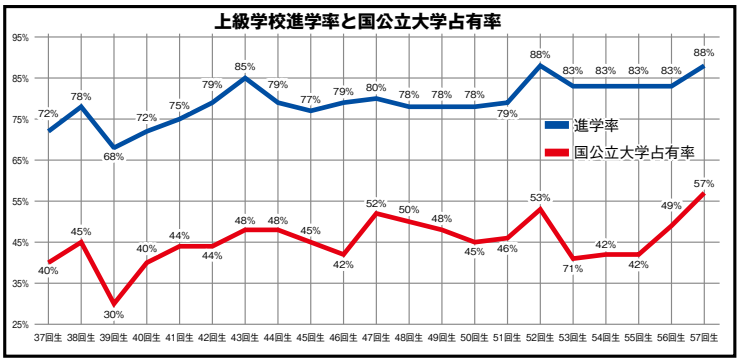
末筆ながら、青森県立八戸北高等学校の一層のご発展と生徒、卒業生方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

これからの北高　私の思い

進路指導主事　山本智也

青森県立八戸北高等学校が創立60年を迎えることができ、心から嬉しく思います。また、この記念すべき年を本校職員として迎えることができたことも大変光栄に思います。

さて、上のグラフは本校の21年間の進学率と国公立大学進学者の割合のグラフです。50周年以前の10年と比べてこの10年間は、平均で上級学校への進学率が約5％、国公立大学の占有率が3％上昇し、特に昨年度の卒業生の進学率は88.3％と過去最高となりました。進路希望調査でも、99％の生徒が短大以上の上級学校への進学を希望しており、この10年でさらに飛躍を遂げてきました。これは歴代の校長先生をはじめ、本校に関わった全教職員の熱意、生徒の努力はもちろん、保護者、後援会、同窓会、地域の皆様のご理解と温かいご支援の賜物と深く感謝申し上げます。



本校には校訓がありません。生徒には無限の可能性があり、その可能性を伸ばしてほしいとの願いからあえて掲げなかったのだそうです。その願いどおり、本校生徒は、勉強や部活動ばかりではなく、自身の興味・関心をより深められるよう、科学系オリンピックや科学の甲子園、マスフェスタ等の探究活動に仲間と協力しながら積極的にチャレンジしています。朝早くから学校が閉まるまで、様々な場所で生徒同士、自由、活発に議論しあっている姿は、まさにこれを体現していると思います。このことは、進学先にも反映されており、形式科学や自然科学、人文・社会科学、応用科学分野ばかりではなく、芸術分野や学際分野など多岐にわたる分野の学部に進学しています。

ところで、これからの時代は、情報化・グローバル化の加速度的進展やAIの発達により、世の中の仕組みや考え方の変化のスピードが非常に早く変化することで、今までの経験から今後の予測がしにくい、いわゆる「予測困難な時代」と言われています。このような時代では、「考え抜く力」「チームで働く力」「行動力」「臨機応変な対応力」等、主体的に考え、様々な課題に対して仲間と協力しながら解決に向け行動する力が求められています。

本校でもこの2年間、教職員と生徒でこれから高校においてつけるべき資質・能力を話し合い、4つの柱、12の資質能力を作成し、目指す生徒像としてまとめてきました。これから社会で求められる力は、高校生活のすべての場面で培われるものだと思います。これまでの先輩のように、「規律ある自由」の精神をもって、毎日の学校生活に全力で打ち込んでほしいと思います。

今後も仲間と共に切磋琢磨しながら個性を伸ばし、階（きざはし）を上るように一歩一歩自らを高め、青桐（あおぎり）のように大きく成長し、これからの時代において、先輩方のように一隅を照らす存在として、社会で活躍してほしいと願っています。

私の思い

伝統の継承

生徒会長　関口実佳

まず初めに、八戸北高等学校創立六十年にあたり、八戸北高校を支え、共に六十年間の歴史を築き上げてくださった皆様に心より感謝申し上げます。また、八戸北高校創立六十年という記念すべき年を在学中に迎えることができとても光栄に思います。

私たち58回生が入学した年には新型コロナウイルスが発生し、学校行事にとどまらず日常生活や課外活動が一変してしまいました。行事の様式が毎年変化しているため、これまでの行事の姿は分かりませんが、生徒会の北高祭企画案には、第一に、「例年通り」という目標を掲げています。一見すると私たちは伝統を直接目にしていないように感じられるかもしれません。しかし学校生活を毎年同じように進めることだけが「伝統」ではないのだと私は気づかされました。私が感じた八戸北高校の伝統。それは北高生の自主性を重んじる方針と、学業と部活動、委員会その他を両立させ文武両道に励むことができる北高生の精神の強さです。

八戸北高校では、生徒が主体的に考え行動することを目的として校訓は作られていません。校訓がないということは高校生活でのゴール地点を生徒自身で決めるということ。つまり、「この高校生活で自分をどのような人間にしたいのか」その決定を私たち生徒に委ねているのです。自分がどこまで高みを目指すのかでその人生は大きく変わると私は思います。「人生を自分で決める」という状況は当然のようでありながら、実は自己責任を強いられた厳しい環境だということです。しかし八戸北高校はただ厳しいだけではありません。先生方は、生徒がより高い目標を目指し実行できる環境を作ってくださっています。私はまさにそこが八戸北高校の強みだと確信しています。生徒の進路実現に向けた先生方の手厚く心強いご指導や、各行事に生徒の意思を反映させようと進めてくださる姿を見て、私たち生徒は本気になろうと思えるのです。

またもう一つの伝統、北高生の精神の強さについて。北高生は入学してすぐに進路について考え始め、勉学にいそしみながら、部活動、委員会、ボランティア活動などと両立させ、決して楽ではない環境で実力を高めています。きっとそれが北高生の心を強く美しく磨きあげているのでしょう。先輩方が成し遂げられてきた栄光もその努力の賜物に違いありません。3年間で月日を重ねるごとに輝きを増す北高生の心こそ、永遠に絶えない伝統そのものだと私は思います。

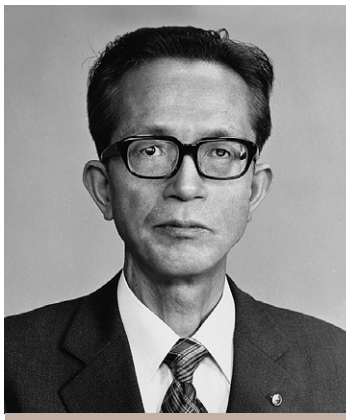
生徒会ではそれらの伝統を生かしながら、生徒全員が北高生でよかったと思えるように、生徒の気持ちが反映される学校生活の実現を目指し続けます。学校にクラスメイト全員がそろう、友達と話しながらご飯を食べる、それが決して当たり前ではないと知った現在（いま）、私たちは「学校で友達と勉強できる」ことへのありがたみを一層感じることができました。だからこそ「全校生徒が一つの体育館に集まり、北高の校歌を歌う」その日が一日も早くやってくることを信じて生徒会は前進し続けます。

昭和38年に八戸北高校が創立してから半世紀以上を越え、時代も世代も変わっていく中で、私たちが北高生であったという事実が変わることはありません。八戸北高校は私たちの一生の「母校」です。私は八戸北高校の生徒であることを心から誇りに思います。

創立六十年という記念すべき年を迎えられたことに感謝し、これからも北高生一同「叡智の瞳」で歴史を築き上げていきます。

歴代校長

7代　塚原良一
自 昭和63年4月1日
至 平成3年3月31日



4代　太田三男
自 昭和50年4月1日
至 昭和53年3月31日

初代　横濱正大
自 昭和38年4月1日
至 昭和43年3月31日

8代　根城弘昌
自 平成3年4月1日
至 平成5年3月31日

5代　松原一郎
自 昭和53年4月1日
至 昭和60年3月31日

2代　正井寛三
自 昭和43年4月1日
至 昭和47年3月31日

9代　渡邊　敏
自 平成5年4月1日
至 平成7年3月31日

6代　大井健次
自 昭和60年4月1日
至 昭和63年3月31日

3代　根城正一郎
自 昭和47年4月1日
至 昭和50年3月31日

16代　竹　浪　二三正
自 平成27年４月１日
至 平成30年３月31日

13代　小　林　喜　輝
自 平成15年４月１日
至 平成19年３月31日

10代　上　崎　　巌
自 平成７年４月１日
至 平成10年３月31日

17代　佐　藤　昭　雄
自 平成30年４月１日
至 令和３年３月31日

14代　熊　谷　祥　生
自 平成19年４月１日
至 平成24年３月31日

11代　前　田　良　三
自 平成10年４月１日
至 平成13年３月31日

18代　種　市　朋　哉
自 令和３年４月１日

15代　福　地　　進
自 平成24年４月１日
至 平成27年３月31日

12代　三　上　時　夫
自 平成13年４月１日
至 平成15年３月31日

歴代父母と教師の会会長

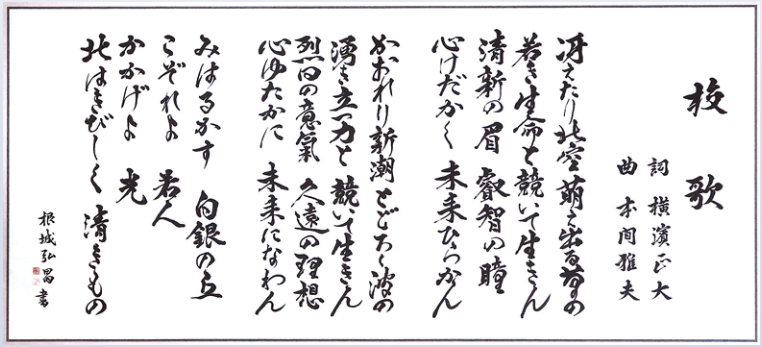
昭和38年度～昭和45年度　戸来　力
昭和46年度～昭和47年度　大橋　慶治
昭和48年度　島田　吉太郎
昭和49年度　荒井　信次
昭和50年度～昭和52年度　大橋　慶治
昭和53年度　亀橋　喜一郎
昭和54年度　佐々木　正雄
昭和55年度　松橋　長英
昭和56年度～昭和59年度　古玉　晨二
昭和60年度～昭和61年度　岡田　欣一
昭和62年度～昭和63年度　富岡　利春
平成元年度　三浦　正純
平成2年度～平成3年度　矢代　弘忠
平成4年度～平成5年度　安田　昭夫
平成6年度～平成7年度　島守　義昭
平成8年度～平成10年度　笹森　昭二
平成11年度～平成13年度　正部家　敏浩
平成14年度　及川　新一
平成15年度～平成18年度　百目鬼　正得
平成19年度～平成20年度　山子　則男
平成21年度～平成22年度　笹田　公烈
平成23年度～平成24年度　柿崎　隆雄
平成25年度　橋本　修
平成26年度～平成29年度　伊東　睦
平成30年度～令和元年度　鈴木　修
令和2年度～現在　石丸　俊浩

歴代後援会理事長

昭和41年5月～昭和62年5月　戸来　力
昭和62年5月～平成15年5月　古玉　晨二
平成15年5月～現在　泉山　元

歴代同窓会会長

昭和40年3月～昭和44年12月　東　辰雄（1回生）
昭和45年1月～平成4年7月　猪内　幸敏（3回生）
平成4年7月～平成11年3月　阿部　裕造（1回生）
平成11年3月～平成25年5月　藤井　和人（7回生）
平成25年5月～平成29年5月　前田　博（11回生）
平成29年5月～現在　上見　昇（13回生）



■校　旗

■校章旗

■帽章・ボタン・襟章・胸章

校　歌

横濱　正大　作詞
本間　雅夫　作曲

♩=84 Maestoso

さえたり　きたぞーら　もえずるくさー
かおれり　にいしーお　とどろくなみー

のわかきいのーちと　きそいていきんせい
のわきたつちからと　きそいていきんれつ

しんのまゆ　えいちの　ひとみ　ここーろけだかー
じつのいき　くおんの　りそう　ここーろゆたかー

くみらーいひらかん
にみらーいになわん

みはるかす　しろがねのおか　こぞれよわこう　どかか

げよひかり　きたはきび　しくきよーきもの

校　章

昭和三十八年三月一日制定。向かいヅルを図案化したものを下地に「北」に北極星を象徴させ「高」を加えて図案化した。
案は当時の弘前大学石原英雄助教授。
開設準備委員会が数回検討し、開校日の昭和三十八年四月七日に決定したものである。

帽章・襟章・胸章

男子生徒の襟章と女子生徒の胸章は、校章のデザインを用い、色によって年次を表している。

1年次生　緑…勉学への希望を表す。新鮮、溌剌を表し、あらゆる事象に興味と関心を持ち、敏感に反応する。

2年次生　赤…勉学への情熱を表す。燦然たる太陽のごとく、一つの事柄に全力を傾注し、燃える。

3年次生　青…勉学の卓越を象徴している。沈静、静寂を意味し、静かに心を鎮めて自分を見つめ、自己を理解し、将来の進路を考え、具体的に計画をたて、可能性を検討して最善を尽くす。

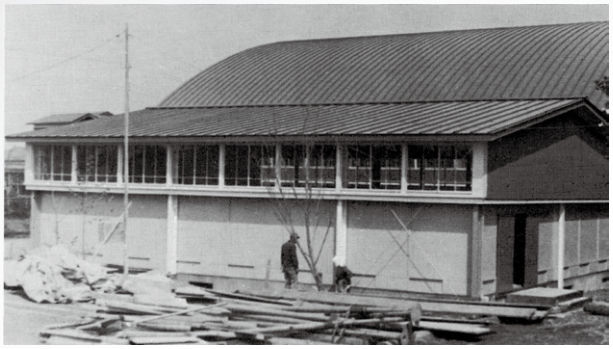
北高応援歌

作詞　横濱正大
作曲　服部文枝

一、燦たり日輪きらめきうけて
色さえざえと旗こそなびく
若き血潮燃え上がれ
行けや行け　剛きもの
力示さん北高今ぞ

二、逆巻く怒涛にゆるがぬ岩は
鍛えに鍛えし力のしるし
若き血潮わき上がれ
行けや行け　猛きもの
力示さん北高今ぞ

過去の主な記念事業



10th

この頃、後援会などの援助で施設が整う
1970年9月　弓道場（正道館）完成
1972年6月　剣道場（斉心館）完成

20th 第二運動場付帯設備の整備

30th 部室棟建設

40th 弓道場建設

50th 生徒会館改築 トレーニング機器の整備

青森県立八戸北高等学校
創立六十年記念事業実行委員会

委員長　泉山　元
記念式典委員長　石丸俊浩
祝賀会実行委員長　上見　昇
記念誌編集委員長　前田　博
記念行事委員長　鶴飼欣也
祝賀会実行副委員長　義積　進
副委員長（校長）　種市朋哉
副委員長（教頭）　柴崎剛吉
副委員長（事務長）　寺沢直子
記念式典副委員長　川越淳智
祝賀会実行副委員長　山本智也
記念誌編集副委員長　工藤武子
記念行事副委員長　竹中秀明

事務局

総務　髙谷浩子
総務　蹴揚義博
総務　春日理璃子
総務　得丸文野
庶務・会計　獅子内幸子

青森県立八戸北高等学校
創立60年記念誌

誇る歴史 かかげよ光

記念誌タイトルは生徒に公募し、２年４組に在籍する古舘京華さんの『誇る歴史』の部分を採用。『かかげよ光』は職員会議の選定により決定。

発行日　令和４年10月１日
発　　行　青森県立八戸北高等学校創立六十年記念事業実行委員会
青森県立八戸北高等学校
〒031-0833　青森県八戸市大字大久保字町道 8-3
TEL. 0178-33-0810　FAX. 0178-33-2439
写真協力　三八五流通株式会社〈ドローン空撮〉
スタジオササキ、株式会社グランフォート、株式会社東建設計
制　　作　有限会社富士印刷
記念誌名　古舘　京華（２年次在籍）
題字揮毫　野里　紀子（２回生）

編　　集　創立六十年記念事業実行委員会　記念誌編集委員会
委員長　前田　　博（後援会理事 ―11回生）
工藤　武子
得丸　文野

祝 青森県立八戸北高等学校創立60年

60th

HACHINOHE KITA H.S.
60th ANNIVERSARY